不自然な強弁 「状況はコントロールされている」

2020年のオリンピックとパラリンピックの開催都市が東京に決まった。前回落選した時の立候補の段階から、私はほとんど興味がなかったし、大阪や福岡や沖縄で開かれるならまだしも、またもや東京の、東京のための、国による「一極集中」「富の固定化」が進むのかと思えば、いささか鼻白んで見ることも許されそうに思う。もちろん、こんなイベントひとつで景気が良くなったり原発事故が収束したり世界と仲良くなれるのならばどんどんやっていただきたい。もちろん、本当に効果があるのなら。

東京都の試算で、経済波及効果が約3兆円だという。これは、この国の経済全体から言うとどれくらいの規模なのだろう。ともあれ、原発事故の後処理、汚染水漏れの問題などについて、「大丈夫！任しとけ！」と大見えを切ったのだから、後は死に物狂いでやっていただくしかないが、開催が決まった途端に東京電力が総理大臣のスピーチと違うことを言い出しているので、また外国から鋭く追及され続けるのかもしれない。

安倍総理はIOC総会で、汚染水漏れについて、「状況はコントロールされている」「汚染水の影響は福島第1原発の港湾内0・3平方キロメートルの範囲内で完全にブロックされている」と断言していたが、福島の漁業関係者がまともに操業できていない状況は、それが不自然な強弁であることを物語っていないか。それでなくとも、オリンピックの開催地に当選するために行われたかのように見える汚染水その他の対策には、何かが違うと感じた人も多いのではないか。

テレビではお手柄お手柄とすでにお祭り騒ぎだけれども、ネット上などでは、選手村の完成予想図と被災地の仮設住宅の写真を抱き合わせて、その優先順位に疑問を投げかける記事も拡散している。もちろん、「祭り」の後に住居として使用することが前提だから単純に比較しても仕方が無いという見方もあるけれど、そもそも被災地の復興にこの2年半の間、どれだけ「死に物狂い」でやってくれているのかを観察すれば、嘆く声が上がるのは当然のことだとも思う。

この原稿を書いている段階（10日）では、アメリカの旗色が芳しくないようだ。化学兵器で無差別に殺戮を行ったとされるシリアのアサド政権に対して、アメリカが軍事行動に出るかどうかで、ケリー氏の失言も飛び出してぬかるみに足を取られている。国内でも反対の声が多いというのは、小ブッシュ政権の時のイラクへの攻撃の副作用で、アメリカ全体が「喉元を過ぎた熱さがまだ忘れられない」ということもあるのだろうけれども、あの結局無かった大量破壊兵器の幻想で難癖をつけて、女性や子供たちを含む何万人もの非戦闘員を殺したアメリカが、「化学兵器を使って非戦闘員を殺した」との名目で小規模、短期間のつもりだとはいえ、五十歩百歩のことをしようとするのはやはり無理筋だろう。

アメリカは、国力がもっと強大だった頃には無理筋も強弁する押しがあったのだろうけれど、オバマ大統領とその周辺のへっぴり腰で威勢良くしている様には、違和を感じる。

罪のない子供たちを巻き添えにしたから懲らしめなければならないというならば、60年以上も前のことではあるけれども、今回とは比べものにならないほどはるかに大規模な無差別大量殺戮をした国はどこなのだろう。

（放送タレント、イラストも）